

# 社会のニーズ「予防的ケア」にどう応えるか

# 抗加齢治療のリアル

2017年8月20日(日)に、これまでにないユニークな形式で開催された「自費研カンファレンス2017」。6名のドクターのお話から、これからの抗加齢医療の方向性と、現在行われている治療の実際をご報告する。



山田秀和先生

近畿大学医学部奈良病院皮膚科教授  
近畿大学医学部奈良病院アンチエイジングセンター 副センター長  
「見えないアンチエイジング研究会」世話人  
日本皮膚科学会専門医・指導医  
日本東洋学会専門医・指導医  
日本アレルギー学会専門医・指導医  
日本抗加齢医学会専門医  
2016年加齢皮膚医学研究会 会長  
2017年日本美容皮膚科学会 総会会長  
2018年日本抗加齢医学会総会 会長

## 「プレシジョン・メデイシンが予防医療を変えるとき、医者は何をすれば良いのか」

100年時代の人生戦略という本があります。この中で、予測によれば2107年には主な先進国では半数以上が100歳よりも長生きするのだそうです。寿命が100歳を超える人生において、医療の役割は今とはかなり異なるものになっていくと思います。

私は近畿大学アンチエイジングセンターにも所属しているのですが、ここでやっているアンチエイジングドックはいわば「未来」に向けての検査です。アンチエイジングドックもいずれはホルルゲノムを使っていくことになると思います。方向性として、人生100年時代にライフプランニングを個別に考えるための検査となっていくと考えています。

EBMと個別化医療を比較するならば、EBMがマス、プレシジョン・メデイシンは、遺伝子、環境、ライフスタイルの3つの点からアプローチするパーソナライズドメデイシンです。「ガ

イドラインはいいけど、それは私に効くの？」という患者さんのニーズに応えられる医療ということですね。

抗加齢医学の世界では、老化の特徴をゲノムの不安定化、テロメアの短縮、エピジェネティックな変化と捉えています。テロメアとエピジェネは今後の課題で、まずその基礎となるゲノムの研究が現在進んでいるところです。

しかし、この研究が進んで、プレシジョン・メデイシンが現実的になってくるにつれ、限界を認識しておく必要が出てきます。精密医療のために遺伝子を調べるとき、「知る権利」と一緒に「知りたくない権利」を考えなければいけません。検査結果は家族・親族にも影響しますし、倫理的問題も出てくるでしょう。

一方、プレシジョン・メデイシンの利点は、二言でいえば、医療意思決定の改善です。個別化医療により、より具体的な疾病予防のためのライフスタイル提案が可能になります。また、治療で使用する薬物も個別最適化が可能になります。社会保障としての医療費も削減できる可能性があります。

日本抗加齢医学会総会では、イリミナ社共催の元、Understand Your

Genome という活動を行っています。

医療関係者がまず自分の遺伝子を。知るために、専門家から解説を受け、知識対応法を勉強しようとする企画それが「Understand Your Genome」です。

参加者は、全ゲノムシーケンスサービスを利用して自分の全ゲノム情報を入力し、インフォームドコンセントから、シーケンスデータの取得と結果の解釈、遺伝カウンセリングまで、ゲノム情報を医療に活用する際に求められる知識を、遺伝カウンセリングや研究者から学びます。私自身も調べてみて、非常に興味深い経験と検査結果を得ました。ご興味のある方はぜひ、日本抗加齢医学会のウェブサイトに、来年の学会の案内で「Understand Your Genome」をご覧ください。

このように、ホルルゲノムシーケンスの研究はどんどん進んでいますが、このまま行くと、20年くらい後には医者



※LIFE SHIFT 100年時代の人生戦略 リンダ・グラットン/ アンドリュー・スコット

